



TITLE:

花山だより(一月)

AUTHOR(S):

月斗

---

CITATION:

月斗. 花山だより(一月). 天界 1936, 16(179): 193-193

ISSUE DATE:

1936-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167174>

RIGHT:

## 花 山 だ よ り (一月)

近年に無い酷寒で、ドームに唸る風の音も一入物凄く、星空の美を觀賞するよりは、ストーブを囲んでシリウスに敬意を表する有様。水と云ふ水は凍つて、折角用心してタンク迄汲上げた水もすつかり屋上に御預けの態。鐵管は破裂する。水槽の氷はテコでも動かぬ。苦心慘憺、タンクからサイフォンで漸やく水を引いてバケツで運搬。臺員總出で大騒ぎ、太陽館では折角撮影した寫眞も現像出來ず山積、眞逆櫻が咲いて實になる迄も、と一同腹を据える。こうなると、低氣壓も憎いが、高氣壓も——さても大氣は邪魔な奴！ 空頼みとはよく云つた。丸で雲をつかむ様な話。散々水攻めにした揚句が風の神の襲來、A氏B氏C氏相續いて頭痛鉢巻の青瓢箪、一向に意氣消沈元氣が無い。待望の慈雨を得て大喜び20日間の垢でも落してと冗談最中。快報?! 東京のK氏から、新星發見!! 某一等星の右1度の至急報。一同折角の慈雨を恨む事しきり、其にしても少し話がぼろ過ぎるが? 先づ晴夜を待つて十分調査の上の事にしよう。翌日某氏は雲の切目を待つて探索——未だ外は明るいですが——する事少時中々件の星が見つからぬ。さては二日の中に消失か? まさか? 之は星に聞いた話ですが、當時遊星が二つ仲善く手を繋いで散策中だつたさうです。天界の浮浪兒鉢巻姿のジョウカ1の姿が眼前に浮びます。其れかあらぬか某氏は此の方一寸風邪氣味との事。誠に御氣の毒な次第。天界萬事塞翁馬悲觀禁物、恆星が少し尻尾をはやして彗星に化けたり、一寸動いて皆二重星、三重星、果ては星團になつたりする天界の事です。來年の事の様に思つてゐた日蝕も最早目前の事實となつて迫つて來た。花山では此度コロナ撮影用の反射鏡5個の製作に、木邊氏は全力を傾倒研磨に當つて居られる。口径 20cm F 10 全部同型品でシベリヤ、滿洲、北海道に分遣される豫定である。既に人選割當等も略定つたが、最後の決定案は何れ纏まり次第發表される事であらう。同好諸兄の中にも熱心なる計畫を有たれる方の多々ある由、誠に御同慶の至りである。又日蝕地の團體からも準備萬端の手筈を整へ、歡迎御援助の企あるとの御報知に益々責任の重大なるを自覺する次第である。Feb. 2. 1936 (月斗生)